

『私の年賀葉書—サクラ』

ピー・ジェイ・エル リミテッド

青木 勇二

A New Year's card illustrated with my own photographs—Sakura

Yuji Aoki

PJL Limited

1. サクラのメッセージ

サクラの花は菊とともに日本の国花であり、日本人の心の中で共有されている。以心伝心というか、俳句の季語に代表されるようにサクラという簡単な言葉によっていろいろな心が伝えられる。反面、日本語特有の曖昧さもある。例えば、季語のサクラはサクラの木よりその花の方にウエイトがあるように思う。現代仮名遣いに訓読は平仮名で「さくら」と表記されるが、その中において植物の名前は適宜に片仮名で「サクラ」と表記されている。「桜木」という固有名詞は当然のように漢字が使われている。しかし、桜の木偏とその次の木が重複しているように見える。念のために広辞苑を披見すると、サクラはバラ科サクラ属の落葉木とある。つまり、漢字の桜は木を意味している。漢和辞典には、「桜花」という熟語はあるが、「桜木」という熟語はない。建材や版木に使われている「サクラの材木」が短縮されて桜木になったようである。英語では、*cherry blossoms* (桜花) となっている。しかし英和辞書の中に和製英語か *cherry trees in blossom* という奇妙な例文があ

る。直訳すると「サクラの木」の木の方が満開ということになりそうである。

サクラは日本の春を象徴しているので、「木偏に春」が最も相応しいと思ったら、椿（ツバキ）に先を越されている。桜（櫻）という字は「木偏に嬰」と決まっている。嬰とはかわいい女の子を意味する、と同時に周囲をぐるりと取り巻くという意味がある。音符はエイで、霙（エイ）という音符に通じる。その霙（みぞれ）は雪が雨とともに舞い落ちてくる様子を表現している。つまり桜（櫻）は「かわいい花が舞い散る木」という意味だとすると、優美な女性—*Graceful lady* という花言葉の意味も納得できる。

それにしても、何故サクラがバラ科に属するのかその理由が良く分らない。品種改良されたサクラは200種を超えると聞いている。バラ科サクラ属からサクラ科へ昇格してあげてはどうだろうか、日本からそんな微笑ましいメッセージがあっても然るべきだと思う。

春、サクラ前線の北上とともに心浮き浮きするのが「お花見」である。古代民族信仰に「春になると豊穡をもたらす女神が天から舞い降りサクラに化身する」、という説がある。お花見の原点はそのような古い時代にまで遡ることができるのかもしれない。満開の花の周囲に農民

が集まり、五穀豊穰を祈願し宴を開いた。それは女神をもてなす神事であり農民自らの憩いの祭事でもあった。花の色からその年の収穫を占ったのであろうか、現在でも、サクラの花が心なしか白く見える年は夏の到来が遅く、場合によっては冷夏になると予測されている。花の色は、光合成色素クロロフィルやカロチノイドに関係があるので、太陽光の多少によって濃くなったり薄くなったりする。そのように花の美しさは自然の変化に敏感である。「決して人間の品種改良によって創造されたものではない」、と自然を強調するサクラのメッセージが聞こえてきそうである。

2. サクラの時間

平成 16 年夏、サクラを題材にした写真を一冊のアルバムにした。私は年賀状にサクラの写真を使うことにしている。昭和 61 年 (1986) に始めたので 19 年になる。その間に撮影した記録を『私の年賀葉書』という小冊子に纏めた。その作品に対する皆様からのご意見もあって、先日、文芸評論家の中西進著、『人間と風物—花』という随筆を読んだ。「サクラの花はしおれない」、とあった。多くの植物は水分が少なくなると枯れて、しおれて生命の終焉を迎える。しかし、サクラは違う、「咲く」と「散る」という二段階しかないのが特徴である。また、栗田勇著、『花を旅する』(岩波新書 722) には、サクラの花の散り方についての一節があった、「奇跡的に経験して開眼したことだが、突然満開のサクラの花弁がわずかな風に舞い上がって桜吹雪となった」と表現しておられる。つまりサクラの花が散るときは「突然」という表現がピッタリしている。私の経験では、京都東山の知恩院の山門が大改修される前、突然舞い上がった花吹雪が黒い山門を背景に素晴らしいコントラストを見せてくれたことがあった。残念なことに、その大振りのサクラは大改修の際にどこか別の場所へ移されたと聞いた。

サクラの木は千年を越える長寿である反面、その花が満開を過ぎると一斉に散るために短命とされている。花の満開は精精 5 日間で「また来週」が無い短さである。春の天候は春一番に始まって、花冷え、花曇り、花の嵐、そして「春に三日の晴れなし」といわれるように変化が激しい。また風も一年を通じて一番強い季節である。1/60 秒という瞬間に撮影できるのにも拘わらず、不安定な春の天候には少々困惑する。「撮影チャンスは 365 分の 1 と低い」、というのが満開の写真の確率である。その理由は撮影のチャンスが一年 365 日のうちにたった 1 日しかないかもしれないからである。満開の間に晴天が何日あるだろうか、平均して 1 日か 2 日しかない。さらに風が強かったり、人出が多かったりするとその最適日数はますます限られる。

次に問題になるのが光の最適時間である。光の角度、つまり順光と逆光を考えると午前か午後 2 時間しかない。このことは午前中に嵯峨野・天竜寺を撮影して、昼食後に反対側の東山・円山公園へと移動することになるという意味である。

花の撮影に夢中になっているうちに「サクラの年輪」に沿って歩いている自分に出会うことがある。サクラの時計の針になったようにぐるぐると歩いている。最初は自分の時計で行動していた筈が、いつの間にか「サクラの時計」になっている。サクラの時計は 12 ヶ月掛かって一回転し、大きな誤差もなく時を刻んで毎年開花の季節を迎え千年という時空を駆け巡っているようである。

3. 古都のサクラ

京都市立堀川高校では写真部員だった。運動場が狭かったので体育の授業だけ嵯峨野のグラウンドへ行った。春には近くの「広沢の池」の畔に満開の花があった。しかし、「花より団子」だったようで写真を撮ることがなかった。



京都・御室仁和寺の五重塔とサクラ
(平成 17 年年賀葉書)。

京都のサクラは、なんといっても平安神宮と天竜寺の枝垂れ桜、御室・仁和寺（おむろ・にんなじ）のサクラではないかと思う。ただ、仁和寺は遅咲きの八重桜なので、4月上旬に満開を迎える東山界限を推奨の方が良心的かもしれない。清水寺から産寧坂を下って円山公園、知恩院、さらに平安神宮、南禅寺までのコースは何度通っても飽きない。静かな写真には西山の天竜寺、勝持寺（花の寺）等のコースが良いかと思う。

太陽の光を存分に浴びた満開の花は見事であ

る。しかし準備をして臨んでも最適条件は30分程である。常に時間との競争である。例えば、宇治・平等院の場合の最適撮影時間は午前11時頃で、仁和寺の場合はそれが午後1時以前でもなく午後3時以後でもない、僅か2時間の勝負である。その間に押し寄せる観光客と駆け引きをするようにシャッターチャンスを窺うことになる。一年待ったアイデアがその瞬間にダメになることもある。最近、花の前でカメラ付き携帯電話を使う人が増えている。周囲に無関心というか正直悩まされる。その理由の一つが携帯やデジカメの広角レンズにあると思われる。つまり花にかなり接近して撮影できるからである。フィルムカメラの標準焦点距離は50ミリであるが、最近のデジカメのそれは24ミリ以下である。花の前で釘付けになっている人々に悲鳴を上げたくなる。「うるさい」という字がそのうち五月蠅から「携帯電話」になるかもしれない。

太陽光線を背中から浴びる順光は、大空からの航空写真が一番有利であるが、一般には東側から西側という平面上での配置になる。さらに写真の構図から見下ろすより見上げる角度を選択するとサクラの花は逆光になる場合がある。またサクラの枝の陰影になる場合もある。構図に気を取られすぎた失敗である。そんな失敗を防いでくれるのがフラッシュである。補助光源として昼間でもフラッシュを使うことをお勧めしたい。フラッシュを頻繁に使うと電池のスペアが必要になる。悪循環のようだが美しい花を撮影するための唯一のアドバイスかもしれない。(平成17年1月)